

# こどもの声を聴く 公立高校入試改革を

2025.07.28 高島峻輔 | 芦屋市長 @中教審 教育課程企画特別部会

# なぜ、市長が高校入試を語るのか

## — 高校入試が現場への大きなメッセージだから

さまざまな対話で「高校入試」への切実な声を聴いてきました

### 中学生



学校によって差があり  
そうな内申点によって  
受検できる高校が左右  
されるのではと不安だ

### 中学教師



授業改善のボトルネックは  
入試。探究型の授業に  
変えたいが、入試がその  
ままだと変えにくい

### 保護者



新しい学びは魅力的。でも  
入試に活かせないなら、  
優先順位は上げないでほしい

**入試は市長には変えられない。だから、当事者の声を届けます**

# なぜ、当事者たる中学生と共創したいのか — 入試は自分ごと。主体的な社会参画になる

高校入試は、自分の将来が行政のルールにより左右される初めての経験。  
「内申点」など現状の入試制度に込められた意図を知る機会にもなる

多くの中学生にとって、高校入試は初めての入学試験です。最も「自分ごと」になるテーマだからこそ、当事者を巻き込んだ議論をすべきではないでしょうか。自分の入試を共創する経験は、**中学生にとって何よりの「主体的な社会参画」**でしょう。さらに、議論に加わることで**入試に込められた**

**意図を中学生が知ることも重要だ**と考えます。現状、内申点や学力検査は、多くの生徒にはふるい落とすための要素としてしか捉えられていません。生徒との共創によって、入試を実施する側の意図が生徒により伝わるのではと期待しています。以下、たたき台として私の考えを述べます。

# 高校入試の目指す方向性は、マッチングでは — 偏差値ではなく、高校の特色・魅力を重視

高校の特色化・魅力化の時代では、**偏差値による序列付けではなく、各校の特色や魅力に応じたマッチング**がより重視されるべきではないか

少子化が進む中、各高校は生き残りをかけて**特色・魅力ある教育の実現**を目指しています。いまや志望校選びは、単なる偏差値による序列ではなく、各校の特色や魅力を重視する時代に移っているのではないのでしょうか。そうなると、複数の学校を同程度に志望したいと考えることも有り得ます。

公立高校の複数出願制度は積極的に検討すべきと考えます。また偏差値等によって画一的な序列をつけられない時代になれば、一部の都道府県に存在する「第一志望ボーナス点」のような、上位志望の場合に点数で優遇する制度ではなく、マッチングを測る入試制度導入を検討すべきと考えます。

# 提案① 主体性を引き出す内申点制度の再設計 —「内申に響くぞ」ではなく、主体性を重視へ

現状の内申点は、毎日学校に通える生徒が前提の制度。

生徒の主体的な日常の行動を評価するような内申点の活用を。

もちろん、入試一発勝負ではない制度構築は重要です。ただ、不登校をはじめ多様な背景を有する生徒の個性・特性を十分に踏まえて選抜するには、評定をつける際に十分な配慮が必要です。特に実技教科を重視する配点の場合は、特に不登校の生徒の公立高校への進学可能性が下がることに留意

すべきと考えます。また、内申点の割合が高いと、日々の学校生活の中で、心のどこかで内申点を気にしてしまう状態に陥りやすいのではないかと。その教科本来の学び、活動の楽しさに浸るよりも、先生がつける内申点が気になると、「主体的・対話的で深い学び」には至りにくいと考えます。

# 提案 ② 探究的な学力検査への刷新とDX

## — 中学校の授業改善を後押しする学力検査へ

中学校の授業を探究的なものに改善しようという観点から考えると、**記述式を含めた探究的な問題の出題**が求められる。そのために**DXが不可欠**

中学校現場からは、**学力検査が探究的な問題に変化すれば、中学校現場の授業も改善しやすい**という声が上がっています。

ただ今後、複数高校への出願を認めるのであれば、会場を超えた採点基準のすり合わせが発生してしまいます。その結果、採点のブレが小さい選択式・短答式を多く取り

入れることになれば、本末転倒です。採点を教師以外が担う方法を模索できないでしょうか。例えば、**生成AI等、デジタル技術の採点への利活用**を検討してはどうでしょうか。採点を含め、ミスが許されない事務に従事している教師の負担減も狙いの一つです。

# 提案② 探究的な学力検査への刷新とDX

## — 都道府県を超えた作問協働も選択肢の一つ

採点の態勢が確保された上で、良質な記述式・探究的な問題を出題するために、**都道府県を超えた作問の協働**ができてよいのではないか

一方で、採点の態勢が確保されたとしても、良質な記述式・探究的な問題を出題することは、都道府県教育委員会において非常に大変な業務であろうと推察します。そこで、良質な問題を出題するためであれば、**都道府県を超えた作問の協働**も検討できるのではないのでしょうか。

もちろん、郷土についての問題など、都道府県ごとのこだわりを残すことも重要だと考えますが、協働によって全体の負担を減らせるのであれば、検討しても良いのではないかと考えます。一部の都道府県が行っているように、高校ごとに入試問題を変えることも一案かもしれません。

# 提案 ③ 教師にしかできない面接等の活用

## — 志望高校と志望生徒のマッチングにも貢献

教師は教師にしかできない仕事に集中できる環境を整えることが重要。  
DXによって働き方改革が進んだあとは、面接等に集中するのはどうか

デジタル技術等の活用によって教師の入試分野における働き方改革が進むのであれば、教師の皆さまにはぜひ、教師にしかできない仕事をしていただければと考えます。例えば、今回の資料にも取り上げられていた広島県の「自己表現」など、対面で人間の教師が採点することに意味がある部

分に時間を割けると良いのではないかと考えます。また、これらの手法は、今後重要性が高まるであろう志望校と志望生徒のマッチングにも資すると考えられます。

——以上はあくまで私の私案です。当事者たる中学生を巻き込んだ議論が行われることを期待しています。